東地区ソフトボール大会　取材記

表　彰　式

大利根緑地グランド

箱田中グランド

東中グランド

五月十九日（日）、五月晴れとは言えないが穏やかなスポーツ日和となった。東地区恒例の男子ソフトボール大会が、箱田中校庭、東中校庭、大利根緑地の三カ所で行われた。

今回は、５５回ということだ。１９６０年代、当時の学校区（東地区）で、地域の人々との親睦、体力増進等を目標に始まった。東地区体育推進委員会、自治会連合会等が中心となった。

三カ所の会場で、試合の様子を取材した。各町の選手は、緊張気味の人、自信ありそうな人、若い頃より少々体型が変わってしまった人など、基本的にはどの人も、楽しもうという思いで参加しているようだ。

それぞれの町の方々に聞いた様子では、一日だけ練習した、今日が初めて、クラブチームのような集まりで実践的に練習しているなどチーム編成や経過は様々なようだ。各町に共通していえることは、選手をそろえるのに苦労している町が多いようだ。回覧板を回してもなしのつぶてが多く、役員の人脈に頼ったり、学生時代にスポーツをやっていたという人を訪ねたりで大変なようだ。

各会場の雰囲気を記してみると。

【東中学校】校舎に沿って花壇に花が植えられて心和む感じがした。試合の方は、、やはり広いので私には、試合の流れがよく分からない。ここでは、新調されたというピンクの格子柄のユニフォームの町の選手、若い人が多いのか、ユニフォームのせいか元気はつらつに見えた。この会場では、体育館のガラス窓が割れるのではと心配してしまうほどのホームランがいくつも出ていた。

【箱中】二面を使って試合が行われていた。広い校庭に２つの試合会場では、あまりにも広く試合の様子はよく分からなかった。しかし、各町応援の方々も一生懸命で、皆さん一体となり楽しそうな様子がうかがえた。

【大利根緑地】グランドの後方には、利根川の流れがあり、欅の大樹に囲まれた緑豊かな会場。やや狭く感じ、観ている間にもホームランが多数出ていた。球は、利根川に入らないかとも心配した。こちらの会場では、元気良い声援が飛び交っており、選手がとても元気づけられている様子だった。

試合結果は、

優勝　西箱田町
準優勝　江田町
三位　上新田町
四位　下新田町

終わりに、事前準備等されてきた各役員さんに感謝の気持ちを送りたい。

館報編集委員会　木村　恭子

東地区の歴史と地名

奈良時代の上毛野国（かみつけぬのくに）から上野国（かみつけのくに・こうずけのくに）と次第に変わり、群馬県に至っています。郡は十四あり、当地は群馬郡に属します。

平安時代の条里制水田遺跡が東地区に多く発見されています。この条里制の田圃の形から箱田、田圃の溝や畔などに沿って川は流れ、角張って曲りが出来たことから、川曲の地名が名付けられています。

また、中央政府のある奈良・近畿地方と東国を結ぶ官道の「東山道」が碓水峠ー野後駅ー群馬駅（小相木町）ー佐位駅ー新田駅ー下野国ー多賀城と続いていました。

群馬駅（くるまのうまや）の近くの小川に橋が架かっており、その橋を「駅橋」（うまやばし）と言っていた。戦国時代には厩橋（まやばし）と呼ばれ、江戸時代の慶安の頃より前橋（まえばし）と改められ、三七六年前から前橋と言われたことがわかります。

この群馬駅から国府駅（こうえき）が訛って小相木となったと言われています。

また、東山道の群馬駅に付随して市が立ち、この市から古市の地名が起こったと考えられます。また、国府の朱雀門があった付近から、朱雀→朱鳥（あかがらす）→赤鳥と転訛（てんか）して、古市の小字（こあざ）の赤鳥も発生しています。

鎌倉時代、鎌倉から越後への街道が武蔵国ー玉村町ー小相木、渋川ー越後国へ続く江戸時代の佐渡奉行街道で、上新田・下新田は宿を形成して、町東・町西・町下・町頭・大道東・大道西などの小字が出来ています。

また、東道（あずまみち）が日高ー江田ー箱田ー小相木ー実正の渡しー実正関所へと通過、箱田の道上・道下の小字を残しています。

室町時代末期の天文八年～一二年の大洪水により、利根川は現在の流路に変わり、東西の通行に支障となり、不便となりました。

江戸時代の慶長九年には、天狗岩用水（滝川）が完成し、水田開発が行われ、上新田・下新田・稲荷新田の各村が誕生しています。

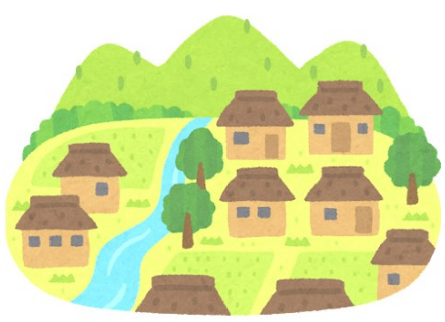
明治四年一〇月第一次群馬発足。県名は、中央にある群馬郡の群馬をとって名付けています。山田・新田・邑楽の三郡は栃木県になりました。

同六年二月群馬県・入間県が合併し、熊谷県が発足。同九年八月第二次群馬県発足。現在の群馬県の範囲となりました。

同一七年八月二〇日上野ー高崎ー内藤分ステーション（現石倉町）間の鉄道開通。文明開化の波が近くの内藤分に届いたのです。

同二二年四月一日東村が誕生しています。

同年、小山ー高崎間の両毛線が開通、内藤分ステーションは廃止され、駅は遠くなり不便となってしまいました。



大正一〇年七月一日高崎ー渋川間の上越線が開通。新前橋駅が誕生し、後の新町名制定時にこの駅名が採用され、新前橋町が誕生しています。

昭和二九年東村は、前橋市と合併、村制時の各大字は、同市の町名に継承されています。

昭和三八年から新町名の誕生、字の区域変更、開発等により小字が消滅しています。消滅する貴重な小字名を記録して、後世の人達に残しておきたいものです。

館報編集委員会　小池　照一